



題字 学長 シスター・メリー・ユージニア

昭和43年6月10日発行

編集責任者 淡 幸子

発行者 ノートルダム
女子大学同窓会

印刷所 真美印刷株式会社



April 14, 1968

As I write this note to you on this glorious feast of Easter, I pray that you may share in the love, happiness and peace which is Christ's gift to us.

Many of you, I hope, will be able to come on May 5 to renew and strengthen the ties of friendship that have grown through the years. However, should weighty reasons prevent others of you from coming know that we still count on you as loyal daughters of Notre Dame. Through the efforts of all of you Notre Dame will grow and flourish.

With my love to each of you, I remain.

Devotedly yours,

Sister Mary Eugenia, S.S.N.D.

Sister Mary Eugenia. S.S.N.D.



(三)

「美しい」という言葉によせて

波 辺 純

私の好きな言葉の一つに「美しい」という言葉がある。「きれい」とか「うるわしい」とも異なるニュアンスを持っている。「美しい」を beautiful であらわすならば、「きれい」は pretty, 「うるわしい」は beautiful であろうか。私が「美しい」という言葉を好むのは、それが「美人」とか「美観」などに関係があるからというより単純な理由からでないことは明瞭である。「美しい風土」「美しいころ」「美しい行為」等々、色々な言葉の修飾語としても、素晴らしいひとと内容を伝えるように思われる。これを単に「きれいな風土」「きれいなころ」「きれいな行為」としてしまおうと、ニュアンスは全く異なったものとなる。これらの場合、スモッグや公害のおそれのない或は汚職や犯罪と関係のないという様な内容しか伝えないこととなる。成程公害や汚職が色々な方面で社会問題となつて、大きくクローズ・アップされて来ると、そうしたことを関係のない「きれいな」環境や風土に住み度いと願うのは、人情の自然であらう。そこへ行くと、さしずめ吾が京都などは単に「きれいな」風土にめぐまれているというだけでなく、更に「美しい」風土にはぐくまれて来たという、今日では成程意味で非常にせいたくな都會と云えるのである。京都に棲み

なれて四季折々、京都は「美しい」と思ふ時がよくある。私の周囲には京都は夏は暑く冬は寒くて全くやりきれないとこぼす人が沢山いる。しかし私はそうは思わない。私は四季折々の京都が好きだ。それは四季折々の京都が「美しい」からなのである。春と秋の京都は、今更論するまでもなく「美しい」。しかし今日の京都の春と秋は、他地域から入り込んで来る群衆(人)のために、一時的に汚染されてしまう。それでも雨の日とか早朝の或る時間には、madding crowd を払いおとして、本来の京都の姿にたちかえる。夏の暑さを除く日中の暑さのあとには、盆地特有の夜涼が味わえるし、観光客を殆ど忘れた様な厳冬の京都には、きびしいまでの「美しさ」がなまはるかな心を寄せつけない想像となつて湧いてくる。私は冬の京都のそういった「美しさ」を見るたび、春迄は絶対に人に汚されず、おかしなないのだから、一種のひそかな安堵感さえ抱くのである。これは私の持つ利己心だといつて非難されても、私は敢えて反対しないだろう。いや、その非難の鞭をあげながら、私はちつと京都の凍る様な底冷えの中で、京都の「美しさ」を眺めていたい。

John Keats は A thing of beauty is a joy for ever. *Eudymon* 冒頭に歌ったが、たとへばどんなにかな

い美でも、それが人間の心にともしびを点する限り、それは永遠の相にかなるものとなるであらう。「美しい」もののはかなさ、波びやすさは縁という程、吾々は見せつけられている。現に我々の住む京都も、年々歳々、その「美しさ」を失いつつあることは、周知の事実である。山紫水明も「川が泣いて」いたりしては全くの台無しだ。雑誌「洛陽」にも、如何に多くの人が、昔のよき時代の京都への郷愁を筆に託して語っていることであらうか。「美しさ」とは所詮失われるものだろうか。若しそうだとしたら、これ程悲しいことはない。否、我々は「美しさ」を

失つてはならないのだ。美しさと、喪失という危険をはらんだ、一種振りつめた姿を宿命とさえしているかに見える。勿論、「美しさ」は黄金で飾りたてたりした、単なる外形的なものではない。要は本質、こころの問題であらう。さしずめ、私などは一日でも長く「美しい」京都での「美しい」環境で教へ且つ学び度いと願うものである。このささやかな念願が、あつかましいといわれる程に、京都が我々の環境が「美しからざる」ものに堕してしまわないことを、ひたすら祈るのである。(一九六八・四・一)

偶 感

私のバクチ (夢)

第一回卒業生

所 明 子

卒業後三年の歳月が過ぎた。私にとつてその三年間に人生の大きい曲り角を大した躊躇もなく進んで来た。私の言葉でこれは大きいバクチであった。一歩間違えば完全に違った人生を過す事になる。

大学生活の間に私が今の満腹した幸せな家庭生活を全く夢見ていなかったと言えは嘘になるかもしれないが、考えていたと言えはこれ又嘘になる。暖かな話だが本当にそうなのだ。学生時代は愉快で有意義な毎日であった。好きな事を好きな様に出来る。それに対して今自分が結婚生活に感じている程の責任もない。今考え

ると最高な事当然である。その最高の環境の中で最高のみ即社会的責任や重大性、困難を考へずた夢のみを走らせる。

私の場合には語学学校の経営にたずさわりたいというのが夢であり私の言うバクチであった。中学、高校、大学と徹底してまず今の国際語たる英語をマスターする事が先決だと思ひ、それに専念したのも私のバクチへの準備であった。不十分ながらも自分の力内フルに努力し又それへの後悔は全くない。アメリカへ短期間ではあるが渡った時も女性が一人で立つにはいかにすべきかを見る

つもりで出かけた。というのはアメリカは社会的に日本より女性が一人立ちする可能性が大だと思つたからだ。しかし問題は場所ではなく人間一人一人の考えとやり方にある事に気がついた。そこで私は自分についての社会的な二つの道を考えた。第一の方法は私がこゝで言ういわゆるバクチの事で危険率は高いが社会へ出て皆と混つて責任や苦勞をして勝つ。即ち夢を達成させる方法。第二は社会の一部ではあるが家庭という一つの安全だともいえるわくの中に入つて女性特有の責任や苦勞を持って少しは小さくなるが夢を達成する方法である。どちらにしろ責任や苦勞なしでの夢達成は不可能であるから。そして帰国後は自分は前者の方法で一人社会に立てる人間かどうかを見る為に就職した。直接希望の英語にもたずさわりたい毎日に張り切つて出発した。しかし二、三ヶ月で何かものたりなさを感じた。それは自分が学生時代に描いた像とちがうからだ。同じであるはずがない。現実には單調さの連続でバクチに成功するかどうかの結果はすぐに出るはずがない。ふとその時自分の考えは中途の苦勞を理論的には理解しているつもりでも甘いものでバクチに勝つた最終的喜びのみを考えたものであった事に気がついた。自分はこんな社会の基礎をもわかつていないのだとある人の曰く「女一人が社会に立つという事は例へば百万円もつていて百万円全てのバクチをするのと同じ事だ」と、即ち百万円が二百万円にもなる代りに失敗すれば〇にも又マイナスにもなるという事だ。もちろん結婚にも危険率は高い事はないが長年多くの人が歩み成功の確率は高い。全く補填されたアスファルト道だと言へる。学生時代にはアス

ファルトなんぞ退屈だ、何かおもしろい事がしたいなどと考えていた。それは社会での失敗のみしめさを知らなかつたからだ。そして成功の嚆矢ばかり夢みていた。そして考え、迷い二つをみた第二の方法を思ひついたので。人に考え方が甘くて卑怯だと言われるかもしれない。両手に花のいゝかげんな考えとも言う人もあらう。しかし私は自分の性格を考慮に入れて可能かどうかわからないが百万円のバクチは出来なくても七十万は確保して三十万でバクチは出来ないかと。幸い自分に一番適した、自分が心から愛せる主人に恵まれた為に一挙に第二の方法に踏み切つた、という打算の横だが全くその時は感情と現実が一致したので。そして今一児の母となりその時の決心を心からよかつた。自分に適当な判断を下したと思ふ。長い将来の事はわからないが少なくとも現在を得又心から安らぎともなる子を得幸せな毎日である。そして現在家族の理解を得た上で将来バクチというか、夢を実現出来る様に将来にそなえて色々経験と力を貯えている。これから先どんな事がおこつて自分の夢が不可能になつても自分で判断を下した道を進む事はなく絶えずそれに向つて前進したい。社会に自分の力を発揮しても家庭を持っても常に責任と義務を忘れる事なく学生時代の新鮮なバクチへの夢は捨てた事なく長い人生を十分に意義のあるものにしたといふ考え。



先日、はからずも女学校の時におそわった先生にお会いしました。一瞬「随分年をとられたものだ」と懐かしさと共に「一種の驚きが私の脳裏をかすめました。私にとっては、約二十年前の昔がまるで昨日のことのように思えます。……そういう自分もあれから二十年の歳月をすくしてきたことは否定出来ない事実なのです。「歳月人を待たず」と、現在は一瞬一刻と過去に足跡を残しながら永遠へと向っています。先生のお話を伺っているだけで、二十年の間毎日に研究を深め、人生の経験を重ね、教育者として、あるいは社会人として円熟さを増しながら充実した年月を送っていたら、しやうたことがよくわかりました。確固たる信念をもち、目的を定めて自己の天職に生きること、邁進努力することが人間の存在をかくも尊く美しく意義あらしめるのでしよう。

ノートルダム女子大学同窓会は、やっ、いや、言い方によってもう四回の同窓生を迎えました。来年には五回目、そろそろ決定時な計画、将来の見通しをたてる基礎作りの頃になったと言ってもよいでしょう。今回は同窓会の役員の方から「マリアン・サービス」について何か書いて欲しいとの依頼がありましたので、私自身も実のところ、はつきりわからないのですが、また誰にもうあけていない私個人でえがいている夢をこゝにあえて披露し、これを潮に同窓生の皆様が心を合せて積極的な将来にそなえての計画を作るといふことを笑って下されることを望んでいます。

「マリアン・サービス」に望むこと

シスター・メリー・セリーン

た、大学生活中に体得したことを土台にして通訳や美しく正しいマナーをもったホステスとして活躍し、国際的に役立つ日本の近代女性になつていただきたいと思います。

しかし、このマリアン・サービスは単に通訳やホステス等の国際的場に進出するだけではなく、目立たないもつと身近な隣人への奉仕をする機関でもあつてほしいと思います。

これが第二の課題です。即ち、病床に苦しみ孤獨な生活をしている人達への慰問及び手伝い、その他、必要に応じて助けを求める人達のために物質的・精神的援助をすることも大切なこととしたいと思います。ノートルダム女子大学の同窓会は、また、そんな社会事業をするには人数も少なく資金もありませんが、お金が出来るまで待つていなければいつ実行が可能になるかわかりません。自分達の手で目的を定めて基金を作りあげるのも善業をする第一歩だと思います。例えば大学祭の時に、卒業生の店を開いたり、ゲーム・コーナーを作ったりして親睦の意味をかねて基金を集めることは如何でしょうか。

第三に、マリアン・スカラシップをさかんにすること。今年でマリアン・スカラシップを受ける人は二名になり、無私の奉仕の精神に生きること

新役員決定

会長 山口玲子
副会長 須賀礼子
会計係 元持昌子、田中宏子
書記係 岡本泰子、小笠原通子
会報係 長谷川克子、中島千鶴、藤山和子、津田紀美子
料理講習会係 竹原美奈子、中井美子
幹事 第一回 山本純子 第二回 高崎喜美子、木戸純子
第三回 増野郁子 第四回 山本千恵子、高月朋子

本年度活動予定

(六月) ○六月五日 学長様の日
九時 ミサ、ガーデン・パーティ
アトラクシオン
(十一月) ○十月三十一日〜四日
大学祭、バザー (オープンデー)
(十二月) ○初旬 お料理講習会、指導シスター・テレサ・マーガレット、於 母校調理室

新会長の言

先日の総会で、同窓会会長という大役をひきうけてしまいました。当日は、総会に遅刻し、何となくぼんやりしていたら、こんな大役につかりました。一応おことわりしたのですが、「家が学校に近い……」という点については、はなはだ不利な点が効を奏しすぎ、遂にこわりきれなくなつてしまいました。当日は、衆天家の私ですが、のんびりとしていたのですが、総会後、幾日かたつた今日では、会長としての誇りをもつより責任を感じ、溜息とともに後悔の念にかられています。こんなわけで例年の会長とちがって一年間の抱負などもなく、まったく暗やみの中を手さぐりであるといっている様な心境です。でも、新しい役

一九六七年度活動報告

員の皆様とともに今年よりもっと多くの人が総会に参加できるよう、又年間の予定行事が無事に終るよう、来年度の五月までがんばりたいと思います。

我々新役員のため会員の皆様の御協力を期待しております。

六月
○一九六七年度同窓会活動計画立案
七月
○同窓会会報発行の準備
○マリアン・サービス活動として母校図書館建設資金集めのためのバザーを計画
八月
○同窓会手帖発行
○同窓会会報第二号発行

九月
○立川澄人・伊藤京子のタチゲット
団体購入
ノートルダム女子大学学生会主催
於 京都館第一ホール

十一月
○学長様の日 記念品贈呈 (清水焼花器一対) 代表者出席
○マリアン・サービス活動、大学祭
中、バザー開設
バザー売上金 八、六六〇円
現金寄附 九三、〇〇〇円
計 一〇一、六六〇円
学長様へ 十万円寄附
○クリスマス料理講習会
講師 シスター・テレサ・マー

ガレット

前年度の会報発行が遅れ合同発行という事になり、六頁の会報を作成

二月
○マリアン・スカラシップ授与者選考 応募者九人
○同窓会について新会員へ説明会
○第四回ノートルダム女子大学卒業式へ列席

三月
○新卒業生へ記念品贈呈
○マリアン・サービス活動
国際先天性異常研究会に、同窓会からアシスタントとして参加しました。小規模ながら、非常にアカデミックで活動も六回目を迎え参加者からも好評の内に終りました。

五月
○第四回同窓会総会

ノートルダム女子大学に修業部が
設立して早や六年、何か新しい飛
躍を期待する転機を迎えました。現
在、クラブの最大の行事は年一回の
演能です。昨年は六月に金剛連盟主
催の自演会に於いて、「井筒」を出
す事が出来ました。今年も同連盟自
演会に於て六月二十三日（金剛能楽
堂）、能「熊野」
を、そして京舞学
生能楽連盟に於て
六月二十九日（観
世会館）舞臺「船弁慶」を出す事
になりました。能を志す者にとっ
て一度はしてみたい、学生としての
見地に立つてその古典芸能に参加し
たい、また一クラブ員として皆で一
つの大成功したものを努力し作り出
す熱情を求めたいなどと様々です。
この様な私達の気持ちに反して、い

マリアン・

スカラシップを得て

谷口 篤美

それは丁度、三月九日の朝だっ
た。

思いがけずマリアン・スカラシッ
プの合格通知を受け取ったのは。と
いうのは、十日までに連絡があれ
ば、合格と聞いていたが、私にその
連絡のない事実を告げ、もうすでに
他の人に届いているものとはかり思
っていたところだったからだ。それ
に、今年は去年と比べて応募人数も
多く、九十九パーセントの不安と、
一パーセントのかすかな光のあるこ
とを期待し、応募したのである。
月並な表現しか出来ないが、その
通知をもらった瞬間、とても信じら
れなかったし、事実、その喜びが、
実感として感じられなかった。そし

クラブ近況

能楽クラブ

つものクラブ員全員の一致は完成し難
いというある障害にぶつかります。
というのは、演能の目的や欲望
が曖昧だからなのです。春休みの半
分以上また放課後毎日の時間を費や
して、自分達の個性を養い、精神
すべてを能に傾け、そして一杯背
伸びして、未熟な力を発揮しなけれ
ばならないという
意志を、一体何人の
人が持ち続ける事
が出来ていくのでし
ょう。欲求するが故の努力と、それぞ
れの環境や条件との葛藤を経てこ
そ、精神的な学生生活の成就が完成
するのです。
もう一つの障害は、能楽に対する
学術的な研究や知識に関する問題で
す。演能に当たりそれを理解しなけ
れば何の意味もありません。少ない

クラブの時間で、資料不足な状態
で、それを研究する事は大変困難で
す。個人的研究によって為されてい
るだけの知識は、ある面での足り
ない類らないものを感じます。年一
回の演能によって私達の一体感を深
め、積極的な立場で、様々な条件と
戦いながら海のないものにしたい
ものです。
能・舞臺子まであと一ヶ月、それ
を充実した心で目的に向かって進め
る様に努力したいと思えます。そし
て演能という事だけでなく、小規模
ながら、クラブの精神面の拡大と飛
躍を求め活動したいと思っていま
す。皆様も能楽クラブの発展を願っ
て下さると共に私達の努力の成果を
も見て下さる様お願い致します。

会計報告

1967年度会計報告（5月5日現在）

収入：	終身会費より	200,000	
	バザー寄附金残	1,660	
	計	201,660	
支出：	摘要	金額	注
	花代	1,000	母校主催文楽の会へ
	花代	2,000	故全恵利さんへ御供
	葉書	6,550	第3回卒業生近況報告及び音楽会返信
	印刷代	1,000	"
	振替申込み	50	"
	名簿印刷代	42,500	名簿・会報発送
	封筒	1,000	"
	切手	13,300	バザー通知
	ワラパン紙	65	バザー札状
	葉書	1,730	"
	印刷代	680	バザー催促状
	葉書	2,415	料理講習会通知
	印刷代	500	"
	葉書	1,680	学長様へプレゼント
	印刷代	400	"
	花器	3,000	"
	花代	150	"
	卒業祝	45,320	総会通知
	往復葉書	7,420	"
	印刷代	1,550	名簿追補
	ワラパン紙	960	名簿追補
	印刷代	6,500	"
	表紙	2,000	"
	総会花代	3,500	"
	総会不足金	6,000	"
	電話電報	4,725	"
	文具	1,000	"
	計	156,995	
残高：		44,665	



第三回卒業生

北村 康子

ふるさと。なんときれいな言
葉であろう。この言葉から連想でき
るのはスモッグに汚れた灰色の町で
も青々立つビルの谷間でもない、し
あわせぬか、戦争のおかげで私は
高校を卒業するまでこの言葉にびっ
たりの四方を山に囲まれ小川が流
れ、春にもなるとレンゲやたんぽぽ
が咲き乱れる田舎で育った。過去を
ふり返る時私の思い出はどうしても
自然から切り離せないものである。

私が高校生になったばかりの春、
病気で寝ていた時の事であった。誰
もが出かけ一人二人で寝るべりなが
ら本を読んでいるとブーンという音
と共に、今までの青であった空が
急に暗くなり驚いて飛び起きた私の
目に写ったのはミツバチの大群であ
った。どうする事もなくガラス越し
に見上げているとミツバチは十分も
するとまた輪を描きながらどこかへ
行ってしまった。ところが二、三日
して起きて外へ出かけるようになって
気がつくとなあミツバチが土蔵の

石垣の中に入り込んでそこで新しい
巣を作ったのである。私はこの新し
い発見に大喜びであった。それか
ら、その巣を通るといつもビクビク
するのであるが、今でも暖かくなる
と元気に外に出てミツを運んで来る
のを見るミツバチも元気で生きて
いるらしい。今でもあのまっ青な空
が急に暗くなったのは忘れようとし
ても忘れられない私の思い出なので
ある。

近頃の子供がレッスンや家庭教師
によって生活の大部分を支配されて
しまふのを見たり聞いたりするにつ
け、またデパートでおたまたまくし
を買わねばならない子供の事を思う
と、土手に寝ころんで好きにだけお
たまたまくしを取る事のできた私を
しあわせであつたと思ひだす。いま
はあつた。また、こんな思い出を十
分に満たしてくる私のふるさとと
はあつた。

一生私の胸の中に、生き続ける事
であつた。

編集後記



（漢野、田村）